

この空のように

沖縄県立開邦中学校二年 謝花 日菜

どしゃぶりの大雨。鋭く地面をつきさすようにいくつもの雨つぶがふりしきる。そんな中でも、いや、そんな中だからこそ、何かいつもと違うことが起こりそうな予感がして、友達とワクワク胸を高鳴らせていた。

四月。学校の平和学習の一貫として、私達是对馬丸記念館をおとずれた。

「大変だったでしょう。」

その優しい言葉と共にふみいれた、対馬丸記念館。さっきまでの台風のような大雨が嘘のように、館内は静まりかえっていた。ひんやりとした。先ほど冷たい雨でびしょぬれになったせいだろうか。館内の空気はずっしりと重く感じた。

「私と同じ誕生日の人いるかな。」

友達に誘われ、生年月日や住所、通っていた学校などから犠牲となった人を探しだせる検索機に自分の誕生日をいれ、検索をかけた。私と同じ誕生日の人は、いなかった。しかし、私達の頭上では、様々な表情をした人達の写真がじっとこちらをみつめていた。

「いた！」

一月十五日。友達の誕生日。その日は、キリッとした目元が特徴的な女性の誕生日でもあった。私よりも年上のその人は、口びるを真一文に結んでいた。何となく覚悟のようなものを感じた。一体いつ撮ったのかわからないモノクロの写真。この人はこれ以上年齢を重ねることなく、亡くなってしまった。まさか対馬丸が沈ぼつするなんて、自分が死んでしまうだなんて考えもしなかっただろう。対馬丸に乗る時は、大雨に興奮していたさっきの私達のように、いつもと違う状況に胸を高鳴らせていたに違いな。きつとやりたいことや不安など、今の私達と同じように色々なことを考えていただろう。しかし、彼女は亡くなってしまった。しかも、深い深い冷たい海の底で。

彼女の命をうばった、たった四発の魚雷。多くの人々の未来を乗せた対馬丸に、魚雷をはなったボーフィン号。

本当に彼らは、ボーフィン号の乗組員は、「悪」なのだろうか。ボーフィン号は対馬丸が学童疎開船だとは知らなかったという。その事を知っていたら、対馬丸の未来は違っていたのだろうか。もしかしたら、乗組員の中には対馬丸に乗っている子供達とちようど同じ年齢の子を持つ親もいたかもしれない。その乗組員にも守るべきものがあつたのだろう。そしてその中には、子供を守るために戦っていた人もいただろう。彼らにだって大切な家族がいたのだから。

子供達の命をうばったことは間違いなく、許されることではない。乗組員を憎むことはたやすいことだ。しかし、それを盾にとり、「正義」として彼らを罰することがはたして平和の道へとつながるのだろうか。今、世界では報復という名の戦争が、あちこちでくり広げられている。そして、正義という名のもとに、多くの人々の命がうばわれている。

「戦争を語る時、悲しみと憎しみが生まれます。悲しみの大きさを希望にかえる努力をしないと、憎しみが報復の連鎖をよびます。」

対馬丸記念館の基本理念の中にもこの一節が記されていた。今、この瞬間も絶えずくり広げられ、大切な人の命がうばわれている戦争。真の平和の道を作るため、今私達がすべきこと。それは、どちらが正しいのかの議論ではなく、互いの違いを認め合い、思いやることなのではないだろうか。正義の反対は、もう一つの正義なのだから。

対馬丸記念館からでると、さっきまで黒い空におおわれていた空が真っ青な空へと変わっていた。まるでさっきの写真の彼女が微笑んでいるかのようにだった。これから私達にできること、それはこの空のように、悲しみを希望にかえていくことではないか。